

複雑社会にこそ求められる研究者魂



渡辺 三枝子
Works Review編集委員
筑波大学 特任教授

学会誌の投稿論文の査読や、政府関連の研究機関の調査報告書の評価を依頼される機会が増えた。おかげで「最近、研究者がどのような問題意識を持ち、分析手法、統計を好んでいるか」を知る機会に恵まれるようになった。若年者や中高年齢者のキャリアとか職業生活、ワークなどを取り上げている研究は増えていることはうれしいが、研究担当者の関心事が何なのかを疑いたくなる作品が少なくないことに気づき、少々さびしい思いになっている。その意味で本誌の社会的価値は高いと思う。

ある日、疑問を持ちながら査読や評価を行っていたとき、私は大学院の必修科目の一つであった「Research Method」で学んだことを思い起こし、以来「研究」という行為の功罪を改めて考え直すようになった。

「Research Method」では、研究者の態度、倫理、統計学や実験研究、量的および定性的研究の長短など、社会科学の陥りやすい問題点などの研究者としての基礎を徹底的に教え込まれた。日本の大学ではあまり目にしない内容

である。私自身はその科目のおかげで「厳しい指導者」のレッテルを貼られるようになってしまったようである。

最近特に思い出すのは「Research Method」の授業の初日に聞いた「我々の社会科学、人間行動に関する研究は bubble theory に似ている」という教授のコメントである。Bubble とは「気泡」のことであるが、気泡二対点純粹の理論のことではない。たとえば、ガラス窓に透明のフィルムを貼り付けるときに大小の気泡ができてしまいがちであるが、フィルムをはる価値を出すためには、気泡をなくす必要がある。しかし一度できた気泡はなかなか消滅しない。押しつぶして一見消えたように見えても気泡の中の空気は消滅するのではなく、移動するだけなのであり、つぶれた気泡の近くに新しい気泡が生まれる現象をさしているのである。

社会科学の研究に関わる我々は、研究を通して複雑な現実を解き明かそうとするのであり、より良い社会の構築に向けて、我々の行動の結果を評価・検証しようとしているのだと思う。

しかし、社会現象・人間行動は時間と空間の広がりの中であって複雑さを極める。したがって、我々の研究は、気泡潰しと同様、ある事象を説明することで別の問題の存在が明らかとなったり、今まで説明されていたはずの現象を別の視点から見ることによって新たな問題が見出されることになることを認識する必要がある、ということに注意を促すものであった。Bubble theory であるから社会科学は不要だということではない。研究者は非常に複雑で多様な要因が絡み合っている現状を対象にするからこそ、自分の関心事を明確にし、研究のテーマを具体的に焦点化する必要があること、さらにリサーチデザイン、データの収集方法や分析手法によっても結果は異なるので、自分の採用するデザインと方法を論理的に意味づけられなければならないということである。そして他者がそれらを認識できるように表明し、その範囲を守って研究することで、明らかになることと、その研究の結果が次なる課題を発見することで、複雑な対象のある部分を明らかにすることができる。言い換えれば、完全に消滅させることができない「気泡」であっても、その性質を明確に認識しておくことで、気泡を消そうとして目的とその努力は新たな視野と展望を提供できるという考えなのである。当たり前すぎることである。

しかし、研究の現状は、その目的と課題の検討、研究の方法、結果の解釈、結論、考察に一貫性がなく、論理性にかけると内容が目につくようになったのはなぜなのであろうか。社会の複雑性にくじかないためであらうか。研究を行う本来の目的が私と比なるためなのであろうか。もしかすると、そのような研究を行う人は、研究の目的とそれを達成させる方法や結果に一貫性が必要だと思っていないのかもしれない。もしかしたら、研究に携わる我々が、「研究する」という行為の本来の目的を見失っていることに気づいていないのかもしれない。研究を開

始すると、それまで気づかなかった興味深い現象をみつけたり、自分の研究計画の不備に気づくことも少なくない。「せっかく集めたデータだから、できるだけ分析しておこう」という誘惑にかられるのかもしれない。しかし、研究は、その内容が非常に普遍的で基礎的なことであろうが、個別具体的なことであろうが、研究者に自己統制力 (self-management) を求めるものであると思う。

Bubble theory は複雑社会を研究対象とする我々に研究の基礎の再認識を促してくれる。それは、「研究は積み重ね」であるということである。研究に関わる者は、過去の研究者の努力の上に自分がいるという現状を認識して、先輩の研究を尊重する精神を持つとともに、自分の研究が次の研究者に研究の発展をゆだねる謙虚さが必要である。徹底した先行研究と客観的な考察が研究には不可欠なのはそのためであらう。別の言い方をすれば、先輩の研究を少しでも超えられる意気込みとともに、次の研究者に研究のテーマを提供する謙虚さをもって具現の対象に挑めることが研究者魂というものではないだろうか。無限の広がりと深さをもつ現象を対象としているが、研究することで、自分の贅力でそのごく一部でも明らかにでき、社会に貢献できるのが研究の醍醐味であらう。

昨年に続いて今年も Works Review に関わらせていただいた。ミドルマネジメントやキャリア支援等一筋縄では解明できない複雑社会の代表的問題と取り組まれた挑戦的な論文が多く興味深かった。しかし、正直に言って、現状分析と問題分析、先行研究さらに分析手法において検討が十分とはいえないものも目についた。言い換えれば、個人的な経験の範囲で、社会的な問題を研究しようとしているということである。複雑社会をテーマにする本誌の社会的役割は大きく、期待も影響も大きいことを意識し、研究者魂を発揮していただきたい。